

田舎暮らし体験住宅

=庄内町小出新田に建築中=

地元産材使った「伝統木構法」の良さをアピール

地元産材を使った「伝統木構法」の住宅建築の普及を図っている1級建築士、川田季彦さん(60)＝酒田市山居町一丁目＝が中心になって、同構法を使った田舎暮らし体験住宅を庄内町小出新田で建築している。

地震の揺れに対応 耐久性に優れる

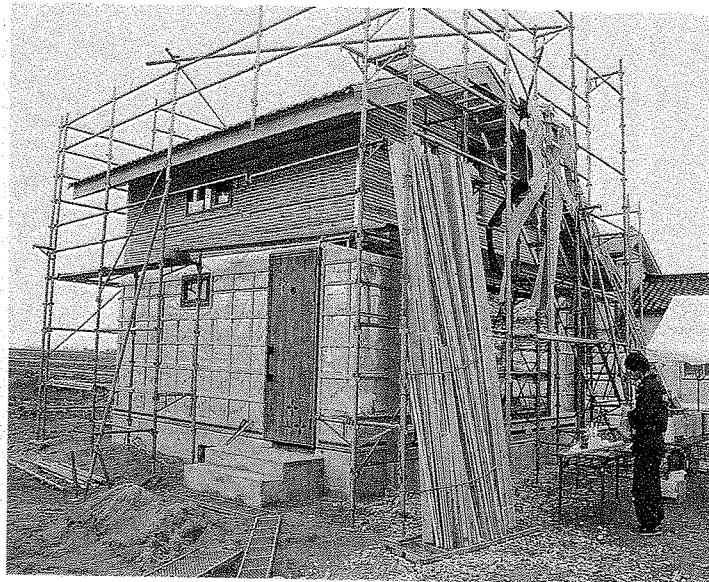
伝統木構法はわが国古来の工法で、無垢の地元産材



川田季彦さん

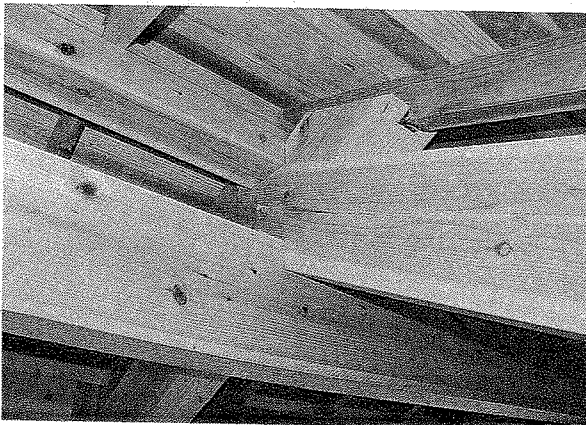
による柱や梁などの構造材を、組み木細工のような技術「仕口」「継手」などでつなぎ、金具や接着剤は使わない。地震の時は木がこすれ合う摩擦などで揺れのを吸収する。維持管理しやすく、耐久性にも優れているという。一方、混同されやすい「在来軸組み工法」は西洋建築を応用した技術で、コンクリート基礎に柱などの構造材をボルトなど金具で固定し、斜めの筋交いを入れ、家全体をゆがまないよう頑丈にする。ことで、地震の揺れなど外力に抵抗する。

川田さんは以前から、法隆寺や羽黒山五重塔など構造部分に金具を使わない伝統建築が、金属の腐食の影響も受けず、数多くの地震や台風にも耐えてきたことに注目。2003年10月に庄内地方の大手や建職人、大学教授らと「ムクの木会」を設立し、伝統木構法や地



伝統木構法で建築中の田舎暮らし体験住宅

元産の天然乾燥木の活用を研究、推進している。庄内町の住宅は、伝統木構法の良さを知ってほしいと、川田さんが土地約550平方メートルを購入。田舎暮らしを体験する施設として今年1月半ばから、ムクの木会と連携して建築している。本造2階建てで、延べ床面積は約45平方メートル。施工は、天然無垢材の住宅を多く手



筋交いがなくて大丈夫かと思ったが、2階が上がってもほとんど揺れないので、逆に強い構造だと実感。この技術を後世まで伝えてい

きたい」と話す。川田さんは「戦後に建築基準法ができ、伝統技術は全否定された感があるが、最近はその良さが見直されつつある。地震の多いわが国では西洋の剛構造より、伝統の柔構造の方が安全で健康的、快適に暮らせる」と話す。全国ではNPO法人伝統木構法の会が設立されるなど、西日本を中心に伝統木構法復権の動きが盛んという。

15日に上棟式を行い、その後は木組みを安定させるためしばらく乾燥させ、完成は夏ごろ。敷地内での農作業を交えた田舎暮らし体験住宅として活用しながら、伝統木構法の良さをアピールしていく。建築関係者の間では既に投首組みなど珍しい伝統工法が注目され、県外からも見学者が来ているという。問い合わせは川田さん＝電0990-1930(0)2870＝へ。

さまさまな技術で木を組む伝統木構法＝小出新田の住宅